

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：37118

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25871008

研究課題名(和文) ヴィゴツキーの児童学理論を中心とした子どもの社会文化的移行に関する基礎的研究

研究課題名(英文) The study of children's Sociocultural transition from Vygotsky's Pedology.

## 研究代表者

岡花 祈一郎 (OKAHANA, Kiichiro)

福岡女学院大学・人間関係学部・講師

研究者番号：50512555

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、小学校への就学という移行を社会文化的な視点からとらえなおし、その意味を再考することであった。本研究では、ヴィゴツキーの児童学で行った研究知見を手がかりとしながら、就学移行プログラムを構築した。

その結果、以下の2つの視座を得ることができた。第一に、年齢発達と環境の変化にともない個人の「情動体験」が変容することである。このことは、「発達の社会的状況」の変化により、個人の経験の有り様が変化することを示唆している。第二に、就学移行期は「発達の危機」として子どもの態度や行動に表れ、一見するところの否定的であるが、それは次への発達の契機を孕んだものであった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to rethink and reflect the school transition from sociocultural stand point. In this study, we constructed the program of transition from Vygotsky's pedological studies.

From Vygotsky studies, it found following two points. Firstly, the emotional experiences was change. In other words, this is due to changes of "social situations of development", it suggests that personal experience was change. Secondly, the school transition period reflected in children's attitudes and behavior as a "crisis of development". This is not a negative moments bat also one of the positive opportunity of development to the next stage.

研究分野：保育学・幼児教育学

キーワード：ヴィゴツキー 就学 移行 児童学 社会文化的アプローチ 遊び

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、幼児教育領域では「小一プロブレム」と呼ばれる就学前から小学校への接続が問題となっている。この「小一プロブレム」といった現象においては、保育所・幼稚園のなかで、遊びを中心とした時間的にも空間的にも自由な文化のなかで育ってきた子どもたちが、学校文化のなかでは上手く自己の力を発揮できないでいる現状がある。

(2) 例えば、米国 NAEYC による「発達にふさわしい教育実践」では乳児から8歳までの子どものカリキュラムを構想している。しかし、現在の日本では、小学校低学年を含めた一貫した幼年期の就学移行期カリキュラムがほとんど存在していない。その理由として、制度上の違いは別として、就学前から小学校、あるいはそれ以後の長いスパンでとらえた発達理論の不在が考えられる。

(3) そこで、手がかりになると考えられるのがロシア・ソビエトの心理学者ヴィゴツキー (Л.С.Выготский 1896-1934) である。ヴィゴツキーは晩年の児童学(педагогика)研究のなかで、当時のロシアの就学時期を「7歳の危機」としてとらえている。また、外的環境の変化と子どもの認識プロセスの変化の葛藤の時期であると指摘している。

以上3点をふまえ、本研究ではヴィゴツキーの児童学研究から得られた発達の知見を手がかりに、社会文化的移行として就学を捉え直していきたい。

## 2. 研究の目的

本研究の目的はヴィゴツキーの発達論を手がかりとした就学移行期プログラムを構築することである。

(1) これまで未刊行であったヴィゴツキーの児童学研究を中心に就学期の発達の、教育的問題を理論的に整理する。また、ソビエト児童学における研究の文脈を整理することでヴィゴツキーの独自性を検証する。

(2) 就学前と就学以後の発達のな特徴と文化的道具の違いに着目し、社会文化的移行としての接続期プログラムを構想しその意義を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) ヴィゴツキーの児童学領域に関する資料収集と文献研究により、その理論を整理する。

(2) 社会文化的移行としての就学プログラムを具体的に構想の上実施し、その効果を検証する。

## 4. 研究成果

(1) 社会文化的移行に関するヴィゴツキーの児童学研究の示唆

ヴィゴツキーは最晩年に児童学という学問領域で研究を行っている。本研究では、主に雑誌『児童学』誌(1928-1932)、および、児童学講義の速記録(「年齢の問題」、

「環境の問題」など)を対象文献として収集分析を行った。その結果、以下の2点が示唆された。

第一に、年齢発達と環境の変化にともない個人の「情動体験」が変容することである。ヴィゴツキーは、子どもと環境の変化をとらえる分析単位として「情動体験」という概念を提示している。この「情動体験」は、個人と環境の関係性をプリズムのように屈折させていくものとして提示されている。具体的にいえば、就学にともない子どもは教師といった人的環境との向き合い方が異なり、そこで生じる情動は就学前と後とは異なるというものである。この点について、Bozhovich (2009)は「情動体験」の概念をさらに解釈し直し、「発達の社会的状況」の変化により、個人の経験の有り様が変化することを指摘した。この点をふまえると、就学は「発達の社会的状況」の変化であり、個人の経験が異なるモノになるということになる。

第二に、就学移行期は「発達の危機」として子どもの態度や行動に表れ、一見するところの否定的であるが、それは次への発達の契機を孕んだものであった。ヴィゴツキーの児童学講義のなかで、「年齢の問題」と「7歳の危機」という講義録が残されている。このテキストからは、就学前から小学校低学年の時期の「危機」と表現している。この危機は、ネガティブな意味のみならず、次の創造的な発達への準備期として位置づけられている。

以上2つの点から、次のようなことが導きだせると考えられる。まず就学移行期は子どもと保育者との関係性が変化し、教育保育のしにくさとして顕在化する。それは一見するところ「小一プロブレム」といった問題行動としてとらえられがちであるが、その内実は「発達の社会的状況」の変化によってもたらされる発達の危機である。これらをふまえ、小学校の先取り(早期教育)のプログラムではなく、子どもの発達を主導するプログラムを構築した。

(2) 就学移行プログラムの開発と実施および検証について

### 問題と目的

本研究ではヴィゴツキーの就学移行プログラムとして「学校ごっこ」という遊びを中心とした保育内容を構想し実践を行った。このプログラムの特徴は以下の2点である。第一に、ヴィゴツキーは就学前の遊びについて、発達を主導する活動として位置づけており、小学校のごっこ遊びを組織的にプログラム化した点である。第二に、「学校ごっこ」は、学校の文化的道具(cultural tools)を媒介とした活動であることを意識した媒介学習経験プログラムである点である(Kozulin, 1998)。

本研究の目的は、「学校ごっこ」実践の分析と理論的検討を通して、保育所・幼稚園における就学に向けた遊び中心の保育内容の可能性を明らかにすることである。本研究で

は就学を学校文化への参入プロセスとしてとらえる。そして、「学校ごっこ」実践は、その参入過程を保育園での遊びを通して擬似的に体験することを意味する。このような経験は、「小一プロブレム」の対策として実施するものではなく、新しい文化への参入にともない「小学生としての自分」を考える契機となることをねらったものである。

#### 方法と手続き

実施日時：秋の実践 20XX年10月13日—20日（約1週間） 冬の実践 20XY年1月15日—31日（約2週間）

実施場所：X保育園

保育内容：申請者と年長の担任を中心とした話し合いの中に、小学校教諭である保護者や主任保育者も参加して具体的なプログラムを構想した。概要は以下の通りである。

〔秋の「学校ごっこ」の主な内容〕

- ・箱の中身をあててみよう（話し合い）
- ・集中して一つのものを描く（デッサン）
- ・どれが飲みたいかな（実験）
- ・パネルを使ってクイズ（左右上下と数の認識）

識）

〔冬の「学校ごっこ」の主な内容〕

・ノートの説明、ひらがなに必要な線を書く、考えて発表する（「あ」のつく言葉）、宿題の説明

・宿題の振り返り、ひらがなに必要な線を書く、考えて発表する（赤いもの）

・参観日、「しょうがっこうにいったら・・・」で始まる文をつくって発表

・プリントで考えてみよう（仲間同士を線で結ぶ）

事例の抽出と分析：ビデオカメラによる記録からと手書きによるメモから観察データを整理した。この観察データから35事例を抽出し分析を行った（事例データは省略）。

就学移行プログラムの意義 - 「学校ごっこ」実践を通して何が育ったのか -

保幼小連携の重要性が議論される時、ともすれば、小学校で問題を起こさずスムーズに学校に適應することが良いこととして社会的に求められていると勘違いしてしまうことがある。しかしながら、福元（2014）が指摘しているように小一プロブレムを適應の問題とすり替えることには大きな危険性を孕んでいる。小一プロブレムといった現象と、就学前に必要な子どもの保育内容や接続期カリキュラムは別で考えられるべきである。では「学校ごっこ」実践は子どもたちの経験にとってどのような意味があるのだろうか。レディネス形成、というのがひとつの回答として考えられるだろう。就学する準備を行う保育である。このような小学校への準備性の議論は欧米を中心とした諸外国でも頻繁に行われてきた。しかしながら、就学レディネスとした場合、準備ができていないか否かという点に焦点化され、スキルや技能に選

元されてしまう恐れがある。また、世界の就学研究の動向をみると、近年ではレディネスとしての技能を子どもに育てることを強調するよりも、子どもにとっての社会文化的資本として、園と学校との連携など移行のためのカリキュラムやプログラムなどが議論されている（Dockett, Petriwskyj & Perry, 2014）。

「学校ごっこ」実践において、子どもたちは小学生になりきっていた。そこでは、通常のごっこ遊びとは異なる「情動体験」がみられた。それは、背伸びした「小学生の自分」を振る舞うという点にある。これは特定の状況における適切な雰囲気をつかんだり、何が求められているかを理解するような実践感覚（habitus）に近いものである。このような「情動体験」や実践感覚は、個人の資質や能力などに還元できるものではなく、当該文化に参入した場合振る舞えるといった感覚として機能するものと定義される。「学校ごっこ」実践で言えば、小学校という独自の文化のなかに入れば、それなりに振る舞えるといった実践感覚の涵養である。ホルツマン（2014）は発達において世界をパフォーマンスする実践のなかでの二重の在り方を指摘している。すなわち、活動時にパフォーマンスする今の自分（being）と、活動時に、今の自分ではない、なりつつある存在（becoming）がある、という二重性である。「学校ごっこ」実践とは、新しい文化へ参入する過程における戸惑いや葛藤を子ども自身が自覚しつつ、学校という文化の中で振る舞うことができる新しい「小学生としての自分」を形成するプロセスであり、それを支える就学移行プログラムとして理解されるべきだろう。

これまで保育所や幼稚園で行われてきた就学移行プログラムは、交流行事をはじめ実際の小学校へ出向き「学校で遊ぶ」経験だったといえるだろう。それに対して、本研究で検討してきた「学校ごっこ」実践は、子どもたちにとって、現実の学校ではなく、想像世界の「学校を遊ぶ」経験である。学校という文化を遊ぶことを通して、学校での振る舞い（habitus）や、教師や学習への向き合いがたを先生役の保育者を媒介にしながら経験していく。このような間接的な経験は、子どもたちに小学校への期待や不安を含め様々な感情を伴うものだろう。それはリアルではないから意味が無いというのではなく、想像世界だからこそ、今の自分では無い「小学生としての自分」を演じ、学校の世界へと一歩あゆみを進めるきっかけになるものである。

#### <引用文献>

Выготский Л.С. (1928). Педология школьного возраста. М.: Изд-во БЗО при педфаке 2-го МГУ, 218 с. Задания № 1-8.  
Выготский Л.С. (1984). Кризис семи лет// Собр.соч.М.Педагогика,Т.4, с.376-385. (「7

歳の危機」柴田義松ほか訳・新児童心理学講義・新読書社、2002年)

Bozhovich, L.I. (2009). The Social Situation of Child Development, *Journal of Russian and East European Psychology* volume 47, no. 1, pp. 59-71.

Dockett, S, Petriwskyj, A, & Perry, B (2014). Theorising transition: shifts and tensions. In Perry, Bob, Dockett, Sue, & Petriwskyj, Anne (Eds.) *Transitions to School: International Research, Policy and Practice*. Springer, pp. 1-18.

福元真由美 (2014). 幼小接続カリキュラムの動向と課題—教育政策における2つのアプローチ— *教育学研究* 第81巻第4号, 396—407.

ホルツマン著 茂呂雄二(訳)(2014). 遊ぶヴィゴツキー: 生成の心理学へ 新曜社 (Lois Holzman (2009). *Vygotsky at Work and Play*, Routledge.)

Kozulin, A. (1998). *Psychological Tools: A Sociocultural Approach to Education*. Harvard University Press.

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

岡花祈一郎・七木田敦・津川典子(2016) 遊びを中心としたアプローチカリキュラムの可能性—保育園における「学校ごっこ」実践の検討を通して—『*幼年教育研究年報*』第38巻(印刷中), 査読なし, 12 - 21頁.

越中康治・濱田祥子・朴信永・八島美菜子・岡花祈一郎・中西さやか・廣瀬真喜子・若林紀乃・松井剛太・山崎晃(2016) 障害のある子どもに関する就学前施設と小学校の連携についての実態調査『*幼年教育研究年報*』第38巻(印刷中), 査読なし, 54 - 62頁.

佐藤仁・樋口裕介・吉田茂孝・岡花祈一郎(2013) 実践的指導力をめぐる教員養成研究の新たな研究視角の模索 - 教育方法学, 特別支援教育, 保育者養成の議論を手がかりに - 『*福岡大学研究部論集 B: 社会科学編*』第6巻, 査読なし, 61 - 75.

<http://ci.nii.ac.jp/naid/120005655342>

〔学会発表〕(計 10件)

岡花祈一郎(2015) 児童学におけるヴィゴツキーの役割, 日本心理学会第79回大会ラウンドテーブル(エリ・エス・ヴィゴツキーと心理学, 児童学及び精神技術学), 2015年9月24日, 名古屋国際会議場(名古屋市)

Kiichiro Okahana (2015) The Meaning of "Pretend Play of School" in Preschool Years: Sociocultural Approach for Transition to School. *European Early Childhood Education Research*

Association (EECERA), 8<sup>th</sup> September 2015, in Barcelona, Spain.

岡花祈一郎(2015) 就学移行期における子どもの遊びと学び概念の再考, 日本保育学会第68回大会, 2015年5月10日, 椋山女学園大学(名古屋市)

岡花祈一郎(2015) 児童期の植民地化とは何か, 日本発達心理学会第26回大会ラウンドテーブル(心理学における新しい流れ2 主体科学としての批判心理学を読む), 2015年3月22日, 東京大学(東京都)

岡花祈一郎(2015) 自然体験における保育者の役割 - 保育者と子どもの言語活動に焦点を当てて -, 日本発達心理学会第26回大会ラウンドテーブル(自然体験の発達の意義を考える), 2015年3月22日, 東京大学(東京都)

岡花祈一郎(2014) ニュージーランドの保育カリキュラムにおける社会文化的理論の意味, 日本乳幼児教育学会第24回大会, 2014年11月29日, 広島大学(広島島市)

岡花祈一郎(2014) 21世紀型学力と協調学習を問いなおす, 中国四国心理学会第70回大会公開シンポジウム, 2014年10月26日, 広島大学(東広島市)

岡花祈一郎(2014) 人間の全体的発達過程におけるエリコニンとワロン - 感情の系と認識の系の関連的発展をめぐって -, 日本発達心理学会第25回大会, 2014年3月23日, 京都大学(京都市)

岡花祈一郎(2013) ヴィゴツキーの児童学研究と発達の最近接領域概念への影響, 日本教育方法学会第49回大会, 2013年10月6日, 埼玉大学(さいたま市)

岡花祈一郎(2013) 保育学における理論研究の意味, 日本保育学会第66回大会, 編集委員会企画ワークショップ(保育学の論文作成にどう取り組むかパート3), 2013年5月12日, 中村学園大学(福岡市)

〔図書〕(計 2件)

岡花祈一郎(2015) ニュージーランドの保育と発展を支える理論: 文化と発達をめぐるストラテジー. 七木田敦・ジュディスダンカン編 『「子育て先進国」ニュージーランドの保育』福村出版 242 (26 - 47頁)

岡花祈一郎(2015) 「ヴィゴツキーの障害児教育論と現代ロシアの教育」黒田学編 『ロシアの障害児教育・インクルーシブ教育(「世界の特別ニーズ教育と社会開発」シリーズ)』クリエイツかもがわ 116 (43 - 53頁)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡花祈一郎 (OKAHANA, Kiichiro)

福岡女学院大学・人間関係学部・講師  
研究者番号： 50512555